

福岡・佐賀県大学図書館見学記

学生協働活動を中心に

渡辺 貴夫（立教大学新座図書館）

1 はじめに

近年大学図書館では学生協働活動が盛んだ。立教大学新座図書館（以下新座図書館と略）で学習支援を担当している私は、2018年12月末に他大学図書館における学生協働活動や、ラーニング・コモンズを中心に図書館施設の動向を知るため、福岡市と佐賀市にある大学図書館3館を見学させて頂いた。この時見聞した事柄の中から、興味をもった西南学院大学及び福岡大学の学習支援と佐賀大学の広報をそれぞれ紹介したい。

2 西南学院大学図書館

福岡市中心部にある西南学院大学図書館は2016年9月竣工、翌2017年4月に開館したばかりである。地上7階建ての外観は、一定の隙間を開けて煉瓦を積み上げた瀟洒なデザイン、館内は階層ごとに少しずつ色調を変えて全体的に落ち着いた色で統一され、ダウンライトの多用や間接照明によって明るすぎず落ち着いた雰囲気演出する照明、木目調の床、一面ガラスによる各施設のゾーン分けがなされる他、館内のあちこちにアートがちりばめられ、おしゃれでほっとした気分で利用できる図書館という印象だった。

各階の機能は1階から3階をアクティブゾーンとしてアクティブ・ラーニングの行為を重要なものと位置付けて学びの交流が起こる空間、そして4階から6階をサイレントゾーンとして従来の図書館機能を踏襲している。

2階のラーニングサポートエリアでは、21名（大学院学生5名、学部学生16名、2019年1月末日現在）のラーニングサポーターが相談対応、備品類貸出、論文やレポートの添削、イベントの企画や実施等の活動をしている。立教大学図書館ではラーニングアドバイザーがレポート作成等学習活動の相談業務に従事しているが、人員は大学院学生12名（池袋図書館8名、新座図書館4名）であるのと比べてかなり多い。

スタッフの採用にあたっては成績やスタッフの所属学部の偏り等を考慮する他、利用者とのコミュニケーションがしっかり取れるかどうかを重視している。

業務の習得方法は、この体制のスタート時には図書館スタッフがレクチャーを行い、その後業者主催の研修を3回実施した。現在は大学院学生スタッフを中心に既存の学部生スタッフがサポートしながら新人スタッフにノウハウを伝



西南学院大学図書館 4F 閲覧席

えている。

相談内容として比較的多いのは、初歩的なレポートの書き方の質問や、コピー機の使い方、グループ学習室の予約についての質問だそうだ。また、相談対応以外では、備品類の貸出対応が圧倒的に多いのに比べて、レポートや論文の添削がまだまだ少ないとのことだ。

サポーターのデスクは長期休暇期間の土日以外いつでもオープンしている。勤務時間帯は平日 8:50-22:00、土曜は 9:00-20:00、日曜は 9:00-20:00 で、図書館が設定した時間帯に、各学期と長期休暇期間毎に希望を募ってシフトを固定しているそうだ。平日 10:35-18:30 は 2 人体制でその他は 1 人体制である。

生憎訪問日が冬季休業期間中でデスクを閉鎖していたため実際の利用・対応状況を見ることができなかった。デスクを見るとブース毎の仕切りを設けていないため、相談に来た利用者は周囲が気にならないのか心配に思ったが、2017 年度相談件数は 2,166 件とのこと。立教大学池袋図書館（以下池袋図書館と略）のように静かな閲覧ゾーンではなく、気兼ねなくコミュニケーションを取れるゾーンにあることが、サービスが利用者に根付いているのだろう。

大人数のラーニングサポーター組織の中で、大学院学生が中心になり新人に向けて業務の継承がなされている仕組みは、次年度のラーニングアドバイザーの確保に悩む新座図書館にとり良い参考事例になるだろう。

3 福岡大学図書館

続いて福岡大学図書館を訪問した。福岡市郊外に位置し地下鉄線の最寄り駅と直結したキャンパス内にある。図書館は中央図書館、分室 4 室、医学部分館から成る。見学させて頂いた中央図書館は 2012 年竣工、地上 5 階地下 1 階建てで、池袋図書館と同じ日建設計が建築設計を請け負ったそうだ。

1 階は入退館ゲートの外側に多目的ホール、ゲートを通るとインフォメーションコーナー、展示スペース、新聞閲覧・ブラウジングコーナーがある。大きくどっしりとした作りでホテルのレセプションのような空間だった。2 階以上は閲覧室となっており、階毎に配架



福岡大学図書館
中央図書館インフォメーションカウンター

資料の主題が分かれ、各階のエレベーター脇にリフレッシュコーナーとラーニングコモンズ、最上階の 5 階には貴重書庫や事務室が配置されている。池袋図書館と同じ建築設計業者であるためか閲覧席や書架のデザインなどが一部似ており、親近感がわいた。

中央図書館の学生協働活動は、ライブラリー・アシスタント（以下 LA と略）による学習支援である。指導教員の承認を受けた大学院生が主に学部 1, 2 年次生に対して様々な学習支援を行っている。採用期間は 1 年間で、平日の

授業時間（90分）単位で週に数コマ従事している。採用の条件として利用者とのコミュニケーションがとれるかどうか重視しているそうだ。2018年度は大学院博士課程前期1年生の学生3人が担当している。

LAの業務内容は、出勤するとまず学部学生時代に読んで役立った資料や、学部学生にお勧めしたい図書のレビューを1本書き、アシスタント受付カウンター横のイーゼルに「今日のおすすめ本」として掲示する。本を介してLAと学部学生がコミュニケーションをとるきっかけ作りを目指して始めたそうだ。このように紹介した資料は学生の多くは心を引くようで、前期、後期に一回ずつ集めて館内展示を行うと、貸出率が高めなのだそうだ。また教員がこれらの本をゼミ生に紹介するなど、資料の利用促進に役立っているとのことである。

LAはレビューを仕上げた後、館内を巡回しながら、困った様子の利用者に近づき、会話の中から助言や指導を行う。その他学部学生に対する学習支援として図書館利用説明会の中で館内案内を担当しLAのサービスを周知し、パスファインダーを作成させて配布している。

また、LAの巡回対象場所に、カウンターがない3階以上のフロアも入るそうで、職員の定期的な見回りの他、さらにきめ細かい利用者支援を目指しているとのことだ。

対応件数は、少ない時で1日2、3件、また前・後期試験前の課題が課されたときや卒論提出前の11～12月初めは1日十数件に増加するそうだ。内容は、館内の利用についての質問が多く、具体的には資料の場所、資料の検索方法、自動書庫の出庫方法、自動貸出機の利用方法などである。次いで多いのがマナーに関する注意、レポートなどに関する相談、PCの利用方法ということである。

このようにLAが学生に歩み寄るスタイルになったのは、ラーニングコモンズに学生が来ない傾向を考慮し試行錯誤した結果だそうだ。新座図書館のラーニングアドバイザーの中には、かつて自主的にブースを立ちラーニングコモンズの中を出歩いてアドバイスを رفتったり、ブース近辺で話したような素振りを見せる利用者に一声かえて相談に導くことを心掛けていた人がいた。福岡大学図書館のライブラリー・アシスタントは、人と人のコミュニケーションを重視することが図書館の利用促進につながる事例ではないだろうか。

4 佐賀大学附属図書館

最後の訪問先として、唯一国立大学の佐賀大学附属図書館本館を訪ねた。本館がある本庄



佐賀大学附属図書館本館 学生選書新着図書棚

キャンパスはJR佐賀駅からバスで約15分の場所にある。キャンパス正門脇にある美術館は平成25年開設で、大学のエントランスとして象徴的な施設だった。図書館を目指して歩きながら見渡したキャンパスは、高層建築が無く広々として落ち着いた風情だった。附属図書館は築約30年とのことだが、改装工事を経て2016年3月下旬に、1階フロア全域が、グループ学習スペース、多目的スペース、談話スペース、PCグループ学習スペース等から

成るラーニングcommonsとなった。その中で目を引いたのは、机や書架のデザインだ。PCグループ学習スペースのテーブルが白い輪環状でその内側に座って利用することや、シラバス図書コーナーや新着図書・学生選書を配架する書架が同様に白色で直線でなく波型に並んでいる。思わず利用して見たくなるデザインだった。

現在訪問先の本館では、残念ながら学生協働の担い手となる図書館サポーターを募集しておらず、唯一の活動として参加者を都度募集して選書ツアーを行っているとのことだった。その一方で鍋島キャンパスにある医学分館では、学生サポーターが17名おり、定期的にミーティングを開催しアイデアを出し合いながら様々な展示を行っているそうである。その例として平成29年8月に開催したオープンキャンパスでは、医学分館で、「図書館サポーターの協力で医学部の現役学生が受験期に読んでいた本や受験勉強に使っていた本、入学後によく用いてきた本や作成したノートなどの展示」を行った¹⁾とのことである。図書館サポーターの活動が入試広報と連携して実施されたことはとても興味深い。

5 さいごに

新座図書館の4月～1月の入館者数累計を見ると、2017年度よりも2018年度の方が微増だったが、ラーニングアドバイザーのレポート相談利用については、2013年度以降増減を繰り返しながら2017年度まで増加傾向にあった件数が2018年度は大きく減少し、前後して観光学部のゼミ選考レポート、現代心理学部「現代心理学入門」、心理学科「心理学実験実習」「心理学調査実習」等、以前は特定の時期に集中していた質問が減少する傾向がある。原因究明もさることながら、このような変化にも動じず対処していくには、サービス提供の発想転換も必要ではないかと感じていた。今回の見学を通して目に留まったのは、上記に挙げたように3館とも独自に利用者と同じ目線でサービスを提供している事例だった。これからは「図書館職員と学生という縦のつながりをつけるとともに、学生同士の横のつながりを活用し、また、図書館職員と大学全体の教職員との横のつながりもつけて、学術情報に触れる利用者をふやす仕掛けづくり²⁾」を目指すことが重要ではないかと思う。学生、図書館、大学教職員それぞれの立場を理解して成される連携により生まれるサービスの実現に向けて努力したい。

最後に、今回の訪問の機会を提供して下さった中村立教大学図書館長、また、丁寧に対応・情報提供くださった西南学院大学図書館永津様、福岡大学図書館末松様、佐賀大学附属図書館大瀧様、岸川様に感謝を申し上げたい。

¹⁾ 「図書館サポーター（さらりーず）による学生協働活動」『ひかり野：佐賀大学附属図書館報 = Saga University Library bulletin』no.40, 2016, p.6.

²⁾ 岩田雅子・松田和也「次世代の大学図書館を目指して—山口県立大学の大学図書館の取り組みについて」『山口県立大学学術情報』no.11, 2018, p.105-106.